

中国怪奇小説集

池北偶談

岡本綺堂

青空文庫

第十三の男は語る。

「清朝しんもその国初の康熙こうぎ、雍正ようせい、乾隆けんりゅうの百三十余年間はめざましい文運隆昌の時代で、嘉慶かけいに至って漸く衰えはじめました。小説筆記のたぐいも、この隆昌時代に出たものは皆よろしいようでございます。わたくしはこれから王士禎おうしていの『池北偶談』について少しくお話をいたそうと存じます。王士禎おうしていといつてはお判りにならないかも知れませんが、王漁洋わうぎようといえは御存じの筈、清朝第一の詩人と推される人物で、無論に学者でございます。

この『池北偶談』はいわゆる小説でもなく、志怪の書でもありません。全部二十六巻を談故、談猷、談芸、談異の四項に分けてありまして、談異はその七巻を占めて居ります。右の七巻のうちから今夜の話題に適したようなものを選びまして、大詩人の怪談をお聴きに入れる次第でございます」

名画の鷹

武昌の張氏の嫁が狐に魅まれた。

狐は毎夜その女のところへ忍んで来るので、張の家では大いに患いて、なんとかして追ひ攘おうと試みたが、遂に成功しなかった。

そのうちに、張の家で客をまねくことがあつて、座敷には秘蔵の掛物をかけた。それは宋の徽宗皇帝の御筆という鷹の一軸である。酒宴が果てて客がみな帰り去った後、夜が更けてからかの狐が忍んで来た。

「今夜は危なかった。もう少しでひどい目に逢うところであつた」と、狐はささやいた。

「どうしたのです」と、女は訊いた。

「おまえの家の堂上に神鷹がかけてある。あの鷹がおれの姿をみると急に羽ばたきをして、今にも飛びかかつて来そうな勢いであつたが、幸いに鷹の頸には鉄の綱が付いているので、飛ぶことが出来なかったのだ」

女は夜があけてからその話をする、家内の者どもも不思議に思った。

「世には名画の奇特といふことがないとは言えない。それでは、試しにその鷹の頸に付いている綱を焼き切ってみようではないか」

評議一決して、その通りに綱を切つて置くと、その夜は狐が姿をみせなかった。翌る朝

になって、その死骸が座敷の前に発見された。かれは霊ある鷹の爪に撃ち殺されたのであった。

その後、張の家は火災に逢つて全焼したが、その燃え盛る火焰ほのおのなかから、一羽の鷹の飛び去るのを見た者があるという。

無頭鬼

張ちようけんちゆう 献けん 忠ちゆう はかの李自成りじせいと相列ならんで、明朝みんの末期における有名の叛賊である。

彼が蜀しよくの成都せいとに拠つて叛乱を起したときに、蜀王の府をもつてわが居城としていたが、それは数百年来の古い建物であつて、人と鬼とが雑居のすがたであつた。ある日、後殿のかたにあたつて、笙歌の声が俄かにきこえたので、彼は怪しんでみずから見とどけにゆくと、殿中には数十の人が手に楽器を持っていた。しかも、かれらにはみな首がなかった。さすがの張献忠もこれには驚いて地に仆たおれた。その以来、かれは其の居を北の城楼へ移して、ふたたび殿中には立ち入らなかつた。

張巡の妾

唐の安禄山が乱をおこした時、張巡は睢陽を守つて屈せず、城中の食尽きたので、彼はわが愛妾を殺して将士に食ましめ、城遂におちいつて捕われたが、なお屈せず、敵を罵つて死んだのは有名の史実で、彼は世に忠臣の亀鑑として伝えられている。

それから九百余年の後、清の康熙年間のことである。会稽の徐藹という諸生が年二十五で瘵という病にかかった。腹中に凝り固まった物があつて、甚だ痛むのである。その物は腹中に在つて人のごとくに語ることもあつた。勿論、こういう奇病であるから、療治の効もなく、病いがいよいよ重くなつたときに、一人の白衣を着た若い女がその枕元に立つて、こんなことを言つて聞かせた。

「あなたは張巡が妾を殺したことを御存じですか。あなたの前の世は張巡で、わたしはその妾であつたのです。あなたが忠臣であるのは誰も知っていますが、その忠臣となるがために、なんの罪もないわたしを殺して、その肉を士卒に食わせるような無残な事をなぜなされた。その恨みを報いるために、わたしは十三代もあなたを付け狙っていました。が、何分にもあなたは代々偉い人にばかり生まれ變つていたので、遂にその機会を得ませ

んでした。しかも今のあなたはさのみ偉い人でもない、単に一個の白面はくめん（若く未熟なこ
と）書生に過ぎませんから、今こそ初めて多年の恨みを報いることが出来たのです」
言い終つて、女のすがたは消えてしまった。病人もそれから間もなく世を去つた。

火の神

武進ぶしんの諸生で楊某ようなにがしという青年が、某家に止宿ししゆくしていたことがある。その家は富んでいたので、主人は毎晩おそくまで飲みあるいていたが、ある夜その主人が例に依つて夜ふけに酔つて帰ると、楊の部屋には燈火あかりが煌々こうこうと輝いていた。

「まだ起きているのか」

主人は窓の隙からそつと覗いてみると、凡つくえのそばには二本の大きい蠟燭を立てて、緋の着物の人が几に倚りかかつて書物を読んでいた。

「楊さんもなかなか勉強だな」

その晩はそのまま帰つて、主人は翌日それを楊に話すと、かれは不思議そうな顔をしていた。

「いえ、ゆうべは早く寝てしまいました」

「いや、わたしが確かに見た。あなたは夜の更けるまで几にむかつていましたよ」と、主人は笑っていた。

しかし楊は笑っていらなかった。

これには何か子細があるに相違ないと思ったので、その晩は寝た振りをして窺っている、夜も三更さんこう（午後十一時―午前一時）とおぼしき頃に、たちまち大きい声で呼ぶ者がある。それと同時に二本の大きい蠟燭ろうそくが地上にあらわれて、くれないの火焰ほのおが昼のようにあたりを照らすかと見るうちに、大勢の家来らしい者どもが緋の着物をきた人を警固して来た。人はここの家の主人がゆうべ見た通りに、几にむかつて書物を読みはじめた。

楊はおどろいて、大きい声で人を呼んだが、誰も来る者はなかった。緋衣の人も聞かないようなふうでしずかに書物を読みつつづけていた。やがて五更ごこう（午前三時―五時）の頃になると、彼は又しずかに起ちあがって楊の寢床へ近寄って来た。他の者どももみな従って来て、楊の寢床の四脚をもたげて部屋じゅうをぐるぐる引きまわした末に、空くうにむかつて幾たびか投げあげた。楊はもう氣絶してしまつて、その後のことは知らなかったが、夜が明けて正氣に復かえった頃には、そこらに何者の姿もみえなかった。部屋の入口をあらためる

と、扉の鑰は元のままで、誰も出入りをしたらしい形跡もなかった。

「もしや夢か」

自分が見ただけならば夢かとも思えるが、現に昨夜もこの主人が同じような不思議を見せられたのであるから、どうも夢とは思われない。こんなところに長居するのは良くないと覺つて、楊は翌日早々にここの家を立ち去った。

それから四、五日の後、突然ここの家に火を發して、楊の部屋は丸焼けになった。

文昌閣の鸛

済南府の学堂、文昌閣ぶんしょうかくの家の棟に二羽の鸛かん（雁鴻がんこうの一種である）が巢を作っていた。ある日、それが西の郊外を高く飛んでいると、軍士の一人が矢を射かけて、その一羽の脛はざにあたった。しかも鳥は落ちないで飛び去った。

その以来、かの鳥はその脛に矢を負ったままで、家の棟の巢を出入りしているのを、大勢の人が常に見ていた。軍士も一時のいたずらであるから、再びそれを射ようともしなかった。

ある日、中丞ちゆうじやうが来て軍隊を検閲するというので、一軍の将士はみな軍門にあつまり、牆壁しょうへきをうしろにして整列していると、かの鳥がその空の上に舞って来て、脛に負っている矢を地に落した。それがあたかもかの軍士の前に落ちて来たので、何ごころなく拾い取って眺めていると、俄かに耳が激しく痒かゆくなったので、彼はその矢鏃やじりで耳を搔いていると、突然にうしろの壁の一部が頽くずれて来て、その右の臂ひじの上に落ちかかったので、矢鏃は耳の奥へ深く突き透った。

「これは鳥の恨みだ。わたしは助からない」と、軍士は言った。
果たして数日の後に、彼は死んだ。

劍侠

某中丞ちゆうじやうが上江の巡撫じゆんぷであつた時、部下の役人に命じて三千金を都へ送らせた。その途中、役人は古い廟に一宿すると、その夜のあいだにかの三千金を何者にか奪われた。しかも扉の鑰かぎは元のままになっているので、すこぶる不思議に思ったが、ともかくも引返してその事を報告すると、中丞は大いに立腹して彼にその償つぐないをしろと責めた。

「勿論のことでございます」と、役人は答えた。「しかし、あまり奇怪の出来事でございますから、一カ月間の御猶予をねがいまして、そのあいだにその秘密を探り出したいと思ひます。わたくしが逃げ隠れをしない証拠には、妻や子を人質に残してまいります」

中丞もそれを許したので、役人は再びかの古廟の付近へ行きむかつて、種々に手を尽くして穿^{せんさく}索したが、遂にその端緒を探り出し得ないので、もう思い切つて帰ろうかと思案しながら、付近の町をぼんやりと歩いていると、町のまんなかで盲目の老人に逢つた。

なんでも判らないことがあらば御相談なさい。——こういう牌^{ふた}がその老人の胸にかけてあつた。物は試^{ため}しであると思つたので、役人は彼をよび止めて相談すると、老人は訊いた。「あなたの失つた金は幾らです」

「三千金です」

「それならば大抵こちら当りがあります。わたしと一緒においでなさい」

老人は先に立つて案内した。最初の一日は人家のある村つづきであつたが、それから先は深山へはいつて、どこをどう辿つたのか判らなかつたが、ともかくも第三日の午頃^{ひる}に大きい賑やかな町へ行き着いた。と思うと、たちまち一人の男が来て役人に声をかけた。

「あなたはここらの人と見えないが、なにしに來たのです」

老人が代つて説明すると、その男はうなずいて役人を案内して行つた。そのうちに老人のすがたは見えなくなつてしまつたので、どうなることかと不安ながら付いてゆくと、大路小路を幾たびか折れ曲がつて、堂々たる大邸宅の門内へ連れ込まれた。さらに奥の間へ案内されると、広い座敷のなかにはただひとつの榻とこを据えて、ひとりの偉丈夫いじょうぶが帽もかぶらず、靴も穿かずに、長い髪を垂れて休息してゐた。そのかたわらには五、六人の童子が扇あおを持つて煽あおいでゐた。役人は謹つつしんで自分の来意を訴えると、男は童子に頗あこで指図して金を運ばせて来た。見ると、それはさきに盗難に逢つた金で、その封も元のまゝになつてゐた。

「この金が欲しいのか」と、男は訊いた。

「頂戴が出来れば結構でございますが……」と、役人は恐る恐る答えた。

「なにしろ疲れたらう。すこし休息するがよい」

ひとりの男が彼をまた案内して、奥まつたひと間へ連れ込み、一旦は扉をしめて立ち去つたが、やがて食事の時刻になると、立派な膳部を運んで来てくれた。それでも役人の不安はまだ去らないので、日の暮れ果てるのを待つて、そつとうしろの戸をあけてあたりを窺るうと、今夜は月の明るい宵で、そこらの壁のきわに何物かが累々るると積み重ねてあるの

が見える。よくよく透かして視ると、それはみな人間の鼻や耳であつたので、役人は気が遠くなるほどに驚かされた。しかし容易に逃げ去るすべはあるまいと思われるので、ただおめおめと夜のあけるのを待っていると、彼は再び主人の男の前によび出された。男はやはりきのうの通りの姿で、彼にむかつて言い渡した。

「あの金をおまえにやることは出来ない。しかしお前の迷惑にならないように、これをやる。持つて歸つて上官にみせろ」

何か一枚の紙にかいた物をくれたので、役人は夢中でそれを受取ると、ひとりの男がまた彼を案内して、三日の後に元の場所まで送り歸してくれた。何がなんだか更にわからなないので、役人はまだ夢をみているような心持で歸つて来て、中丞にその次第を報告し、あわせてかの一紙をみせると、中丞は不思議そうに読んでいたが、たちまちにその顔色が変わった。

役人の妻子はすぐに人質をゆるされた。紛失の三千金もつぐなうには及ばぬと言ひ渡された。それで役人は大いに喜んだが、さてその一紙には何事がしるしてあつたのか、その秘密はわからなかつた。しかも後日になつて、その書中には大略左のごときことが認^{した}めてあるのを洩れ聞いた。

——おまえは平生から官吏として賄賂をむさぼり、横領をほしいままにしている。その罪まことに重々である。就いては小役人などを責めて、償いの金を徴収するな。さもなければ、何月何日の夜半に、おまえの妻の髪の毛が何寸切られていたか、よく検めてみる――

中丞が顔の色を変えて恐れたのも無理はなかった。彼の妻は、その通りに髪を切られていたのである。かの無名の偉丈夫は、いわゆる剣侠のたぐいであることを、役人は初めてさとした。

鏡の恨み

荊州^{けい}の某家の忤^ほは元来が放埒^{ほうらつぷらい}無頼^いの人間であつた。ある時、裏畑^{どべい}に土塀^{どべい}を築こうとすると、その前の夜の夢に一人の美人が枕もとに現われた。

「わたくしは地下にあることすでに数百年に及びまして、神仙となるべき修^{しゅう}煉^{れん}がもう少しで成就するのでございます。ところが、明日おそろしい禍いが迫って参りまして、どうにも逃^{のが}れることが出来なくなりました。それを救つて下さるのは、あなたのほかにあり

ません。明日わたくしの胸の上に古い鏡を見付けたらば、どうぞお取りなされないように願います。そうして元のように土をかけて置いて下されば、きつとお礼をいたします」

くれぐれも頼んで、彼女の姿は消えた。あくる日、人をあつめて工事に取りかかると、果たして土の下から一つの古い棺を掘り出して、その棺をひらいてみると、内には遠いむかしの粧よそおいをした美人の死骸が横たわっていて、その顔色は生けるがごとく、昨夜の夢にあらわれた者とちつとも変らなかつた。更にあらためると、女の胸には直径五、六寸の鏡が載せてあつて、その光りは人の毛髪を射るようにも見えた。悴は夢のことを思い出して、そのままに埋めて置こうとすると、家僕しもべの一人がささやいた。

「その鏡は何か由緒のある品に相違ありません。いわゆる掘出し物だから取ってお置きなさい」

好奇心と慾心とが手伝つて、悴は遂にその鏡を取り上げると、女の死骸はたちまち灰となつてしまった。これには彼もおどろいて、慌ててその棺に土をかけたが、鏡はやはり自分の物にしていると、女の姿が又もや彼の夢にあらわれた。

「あれほど頼んで置いたのに、折角の修煉も仇あだになつてしまいました。しかしそれも自然の命数で、あなたを恨んでも仕方がありません。ただその鏡は大切にしまつて置いて下さ

い。かならずあなたの幸になることがあります」

彼はそれを信じて、その鏡を大切に保存していると、鏡はときどきに声を発することがあつた。ある夜、かの女が又あらわれて彼に教えた。

「宰相の楊公が江陵に府を開いて、才能のある者を徴めしたいといっています。今が出世の時節です。早くおいでなさい」

その当時、楊公が荊州に軍をとどめているのは事実であるので、忤は夢の教えにしたがつて軍門に馳せ参じた。楊公が面会して兵事を談じると、彼は議論縦横、ほとんど常人の及ぶところでないので、楊公は大いにこれを奇として、わが帷いばく幕のうちにとどめて置くことにした。忤は一人の家僕を連れていた。それは女の死骸から鏡を奪うことを勧めた男である。

こうして、その出世は眼前にある時、彼は瑣ささい細のことから激しく立腹して、かの家僕を撲ぶち殺した。自宅ならば格別、それが幕営のうちであるので、彼もその始末に窮している、女がどこからか現われた。

「御心配なさることはありません。あなたは休養のために二、三日の暇を貰うことにして、あなたの輿こしのなかへ家僕の死骸をのせて持ち出せば、誰も気がつく者はありますまい」

言われた通りにして、彼は家僕の死骸をひそかに運び出すと、あたかも軍門を通過する時に、その輿のなかからおびただしい血がどつと流れ出したので、番兵らに怪しまれた。彼はひき戻されて取調べを受けると、その言うことも四度路しどろで何が何やらちつとも判らない。楊公も怪しんで、試みに兵事を談じてみると、ただ茫然として答うるところを知らないという始末である。いよいよ怪しんで嚴重に詮議すると、彼も遂に鏡の一条を打ちあげた。そうして先日来の議論はみな彼女が傍から教えてくれたのであることを白状した。そこで、念のためにその鏡を取ろうとすると、鏡は大きいひびきを発してどこへか飛び去った。彼は獄につながれて死んだ。

韓氏の女

明の末のことである。

広州こうしゅうに兵乱があつた後、周生しゅうせいという男が町へ行つて一つの袴こ（腰から下へ着ける衣きぬである）を買つて来た。その丹い色あかが美しいので衣桁いこうの上にかけて置くと、夜ふけて彼が眠ろうとするときに、ひとりの美しい女が幃とばりをかかけて内を窺っているらしいので、

周はおどろいて咎めると、女は低い声で答えた。

「わたくしはこの世の人ではありません」

周はいよいよ驚いて表へ逃げ出した。夜が明けてから、近所の人びともその話を聞いて集まって来ると、女の声は袴のなかから洩れて出るのである。声は近いかと思えば遠く、遠いかと思えば近く、暫くして一個の美人のすがたが烟りのようにあらわれた。

「わたくしは博羅に住んでいた韓氏の娘でございます。城が落ちたときに、賊のために囚われて辱かしめを受けようとしたが、わたくしは死を決して争い、さんざんに賊を罵つて殺されました。この袴は平生わたくしの身に着けていたものですから、たましいはこれに宿つてまいったのでございます。どうぞ不憫とおぼしめして、浄土へ往生の出来ますように仏事をお営みください」

女は言いさして泣き入った。人びとは哀れにも思い、また不思議にも思つて、早速に衆僧をまねいて仏事を営み、かの丹袴を火に焚いてしまうと、その後はなんの怪しいこともなかった。

張允恭は明の天啓年間の進士（官吏登用試験の及第者）で、南陽の太守となつてゐた。

その頃、河を浚う人夫らが岸に近いところに寝宿りしていると、橋の下で哭くような声が毎晩きこえるので、不審に思つて大勢がうかがうと、それは大きい泥黿であつた。こいつ怪物に相違ないというので、取り押えて鉄の釜で煮殺そうとすると、たちまちに釜のなかで人の声がきこえた。

「おれを殺すな。きつとお前たちに福を授けてやる」

人夫らは怖ろしくなつて、ますますその火を強く焚いたので、やがて泥黿は死んでしまつた。試みにその腹を剖いてみると、ひとりの小さい人の形があらわれた。長さ僅かに五、六寸であるが、その顔には眉も眼も口もみな明らかにそなわつてゐるので、彼らはますます怪しんで、それを太守の張に献上することになった。張もめずらしがつて某学者に見せると、それは管子のいわゆる涸沢の精で、慶忌という物であると教えられた。

（谷の移らず水の絶えざるところには、数百歳にして涸沢の精を生ずと、搜神記にも見えている）。

洞庭の神

梁^{りようすい}遂^{すい}という人が官命を帯びて西^{せい}粵^{えつ}に使いするとき、洞庭^{どうてい}を過^すぎた。天気晴朗の日で、舟を呼んで渡ると、たちまちに空も水も一面に晦^{くろ}くなった。

舟中の人もおどろき怪しんで見まわすと、舟を距^さる五、六町の水上に、一個の神人^{しんじん}の姿があざやかに浮かび出た。立派な髯^{ひげ}を生やして、黒い紗^{しや}巾^{きん}をかぶって、一種異様の獣^{けもの}にまたがっているのである。獣は半身を波にかくして、わずかにその頭角をあらわしているばかりであつた。また一人、その状^{じようぼう}貌^{ぼう}すこぶる怪偉なるものが、かの獣の尾を口にくわえて、あとに続いてゆくのである。

やがて雲低く、雨降り来たと、人も獣もみな雲雨のうちに包まれて、天へ登るかのようになく消えてしまった。

これは折りおりに見ることで、すなわち洞庭の神であると舟びとが説明した。

※蛇

広西^{こうせい}地方には※蛇^{きようだ}というものがある。この蛇は不思議に人の姓名を識^しっていて、それを呼ぶのである。呼ばれて応^{こた}えたと、その人は直ちに死ぬと伝えられている。

そこで、こちらの地方の宿屋では小箱のうちに蜈蚣^{むかで}をたくわえて置いて、泊まり客に注意するのである。

「夜なかにあなたの名を呼ぶ者があつても、かならず返事をしてはなりません。ただ、この箱をあけて蜈蚣を放しておやりなさい」

その通りにすると、蜈蚣はすぐに出て行つて、戸外にひそんでいるかの蛇の脳を刺し、安々と食いころして、ふたたび元の箱へ戻つて来るといふ。

(宋人の小説にある報冤蛇^{ほうえんだ}の話に似ている)。

范祠の鳥

長白山^{ちやうはくさん}の醴泉寺^{れいせんじ}は宋の名臣范文正公^{はんぶんせい}が読書の地として知られ、公の祠^{ほこら}は今も仏殿の東にある。

康熙年間のある秋に霖雨ながあめが降りつづいて、公の祠の家根やねからおびただしい雨漏りがしたので、そこら一面に湿ぬれてしまったが、不思議に公の像はちつとも湿れていない。寺の僧らが怪しんでうかがうと、一羽の大きい鳥が両の翼つばさを張ってその上を掩おおっていた。翼には火のような光りがみえた。

雨が晴れると共に、鳥はどこへか姿を隠した。

追写真

宋荔裳そうれいしょうも国初有名の詩人である。彼は幼いときに母をうしなったので、母のおもかげを偲しのぶごとに涙が流れた。

呉門ごもんのなにがしという男がみずから言うには、それには術があつて、死んだ人の肖像を写生することが出来る。それを追写真ついしゃしんといい、人の歿後数十年を経ても、ありのままの形容を写すのは容易であると説いたので、荔裳は彼に依頼することになった。

彼は淨きよい室内に壇をしつらえさせ、何かの符を自分で書いて供えた。それから三日の後、いよいよ絵具や紙や筆を取り揃え、荔裳に礼拝させて立ち去らせた。

一室の戸は堅く閉じて決して騒がしくしてはならないと注意した。夜になると、たちまち家根瓦に物音がきこえた。

夜半に至つて、彼が絵筆を地になげうつ音がkachiriときこえた。家根瓦にも再び物音がきこえた。彼は戸をあけて荔裳を呼び入れた。

室内には燈火が明るく、そこらには絵具が散らかつて、筆は地上に落ちていた。しかも紙は封じてあつて、まだ啓ひらかれていない。早速に啓いてみると、画像はもう成就して、その風貌はさながら生けるが如くであつた。荔裳はそれを捧げてまた泣いて、その男に厚い謝礼を贈つた。

「死後六十年を過ぎては、追写真も及びません」と、彼は言つたそうである。

蘇穀言そこげん

の随筆にも、宋僉憲そうけんけん

は幼にして父をうしない、その形容を識らないので、方ほ

海山人うかいさんじん

人に肖像をかいて貰つて持ち帰ると、母はそれを見て、まことに生けるが如くで

あると、今更に嘆き悲しんだということが書いてある。してみると、世にはこういう理ことわりがあると思われる。

断腸草

康熙庚申こうきこうしんの春、徽州きしゅうの人で姓を方ほうという者が、郡へ商売に出た。八人の仲間が合資で、千金の代物しろものを持って行つたのである。江南へ行つて、河間の南にある腰※の駅ようてんに宿つた。

仲間の八人と、騾馬らばをひく馬夫とがまず飯を食つた。方は少しおくと、その一人が食いながら独り言をいうのである。

「断腸草だんちようそう……」

それを三度も繰り返すので、方は怪しんだ。

「君は食い物のなかに断腸草があるのを知っているのか。それなら食つてはならないぜ」「そうだ」と、その男は言つた。

見ると、馬夫はすでに中毒状態で仆たおれた。急に一同に注意して食事を中止させ、方は往來へ駆け出してそこらの人たちを呼びあつめた。医師を招いて診察を求めると、それは食い物の中毒であるといつた。解毒剤げどくをあたえられて、一同幸いに本復したが、馬夫だけは多く食つたために生きなかつた。

方は一人の男にむかつて、どうして断腸草の名を口にしたかと訊くと、彼は答えた。

「食っている時に、誰かうしろから断腸草と三度繰り返して言った者があるので、わたしもそれに連れて言ったただけのことで、最初から知っていたわけではないのだ」

断腸草を食べば、はらわたが断きれて死ぬということになっている。それを食い物にまぜて食わせたのは、われわれを毒殺して荷物を奪う手段に相違ないと、一行はそれを訴え出ようといきまいたのを、土地の人びとがいろいろに仲裁し、馬夫の死に対して百金を差し出すことで落着、宿の主人は罪を免かれた。

道中では心得て置くべき事である。

関帝現身

順治じゆんじへいしん丙申へいしんの年、五月二十二日、広東韶州府カントンしやうしゆうふの西城の上に、関羽かんうがたちまち姿をあらわした。彼は城上の垣によりかかって、右の手に長い髯ひげをひねっていたが、時はあたたかも正午であるので、その顔かたちはありありと見られた。

越えて二十三日と二十八日に又あらわれた。

城中の官民はみな駆け集まって礼拝し、総督李棲鳳りせいほうはみずから関帝廟に参詣した。

短人

徳州^{とく}の兵器庫^{みん}は明代の末から久しく鎖^{とぎ}されていたが、順治の初年、役人らが戸を明けると、奥の壁の下に小さい人間を見いだした。

人は身のたけ僅かに一尺余、形は老翁の如くで、全身に毛が生えていた。彼は左の膝を長くひぎまずいて、左の手を垂れたままで握っていた。右の足は地をふんで、右の肘を膝に付け、その手さきは頤を支えていた。髪も鬚^{ひげ}も真っ白で、悲しむが如くに眉をひそめ、眼を閉じていた。

やがて家のまわりに電光雷鳴、その人のゆくえは知れなくなった。

化鳥

郝某^{かく}はかつて湖広の某郡^{すい}の推官^{かん}となっていた。ある日、捕盗の役人を送って行つて、駅舎に一宿した。

夜半に燈下に坐して、倦^うんで仮^{うたた}寝をしていると、恍惚のうちに白衣の女があらわれて、鍼^{はり}でそのひたいを刺すと見て、おどろき醒めた。やがてほんとうに寢床にはいると、又もやその股を刺す者があつた。痛みが激しいので、急に童子を呼び、燭^{しよく}をともしてあらためると、果たして左の股に鍼が刺してあつた。

おそらく刺客^{しかく}の仕業^{しわざ}であろうと、燭をとつて室内を見廻つたが、別に何事もなかつた。

家の隅の暗いところに障子代りの衣^{きぬ}が垂れているので、その隙間から窺^{ぞうふ}うと、そこには大きい鳥のような物が人の如くに立っていた。その全身は水晶に似て、臟腑^{ぞうふ}がみな透いて見えた。

化^け鳥^{ちよう}は人を見て直ぐにつかみかかつて来たので、郝も手に持っている棒をふるつてか

れに逼^{せま}つた。化鳥はとうとう壁ぎわに押し詰められて動くことが出来なくなつたので、郝は大きい声で呼び立てると、従者は窓を破つて飛び込んで来た。棒^{やいば}と刃に攻められて、化鳥は死んだ。

しかも、それが何の怪であるかは誰にも判らなかつた。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

池北偶談

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>